

出東小学校の漢字教育について思う

石井 勲

昭和52年の暮の事だったと思う。「51年より石井方式漢字教育を全校挙げて実践すべく研究しているが、解らない事があるので教員を派遣するから教えてほしい」という趣旨の手紙を稲田校長から受取った。

「それならこちらから行く方がよい」という事で出東小学校を訪問するようになって6年、訪問はこの八月で7回になった。しかし毎年訪問するたびに、先生が何人か新しい先生に変わっていて、最初私が訪問した時に在職していた先生方は、今は一人も残っていない。

それなのに、出東小学校の漢字教育に対する姿勢は少しも変わらない。それというのも常に新しい先生を、その体制の中に温かく包み込んで、完全に同化してしまうからであろう。と同時に、それは石井方式漢字教育の効果が著しいことを、先生方が認めているからだと確信する。

石井方式漢字教育は、労少なくして最も功多き方法であることを自

負するものであるが、勿論、出東小学校の先生方の気取らず気張らない姿勢が、調和を保って息の長い研究を続けさせている主な理由だと思う。

本書103頁に、基本的姿勢として、「いつも『子どもに直接はねかえる研究』をめざし、たえず全職員の共通理解をはかり、各人の創意工夫による実践を大切に行きたい」とあり、また、「いつでも、どこでも、誰にでも出来る、長続きのする研究を目ざして行きたい」と述べている。これは実に立派な態度で、だからこそ、この8年間、指導する先生が次々に変わっても、この教育がますます力強く発展して行っているのだと思う。

石井方式漢字教育は、中間校長が“はじめに”(97頁)で、「感心はしながらも……実践する気にはなれませんでした」と述べられているように、先生方に強い感銘を与えるものがありながら、さて実践にまではなかなか引っ張り込むだけの力に欠ける憾みがある。それは“教科書の漢字貼り、が障害になっているようである。

確かにこれは先生方にとって負担になる仕事である。しかし、同じ

く負担を感じているに違いないと思われる子どもには、134 頁に述べられているように、「漢字貼りの時間を楽しんでいる」のである。

そして、これが子どもたちの漢字力を伸ばすだけでなく、読書の楽しみを子どもたちに解らせてくれるのである。かな書きでは読みにくく、読んでも意味が解りにくいことは、誰だって経験済みのはずである。それは、一年生の子どもにとっても決して例外ではない。

かな書きの、読みにくく解りにくい本を読まされた子どもは、本好きになれる訳がない。それで本を読まないから、ますます本を読む能力が育たない、という悪循環に陥るのである。これを救う道は、漢字を多く提出して本を読みやすくし、解りやすくすることである。

ところが今まで、それは指導要領違反であるとされ、学年別配当漢字表にない漢字を教えることを恐れる先生が多かった。しかし、昨年の全国国語教育研究者集会で講演された文部省の小林一仁教科調査官は、「学年配当漢字表は必ずしも適正ではないので、ふりがなをつけてでも早めに漢字を提出し、なれさせた方がよい」という趣旨の話をされたという。

石井方式漢字教育は決して指導要領違反ではないのである。指導要領の作成や漢字の学年配当に当たられた輿水実先生も、「漢字表の漢字は学習の最低基準を示したものであるから、それを教えないのは指導要領違反であるが、それ以上教えようという石井方式は決して違反ではない」とおっしゃっている。ぜひ安心して実践してほしい。実践してみれば、必ず「やって良かった」と思われるはずである。

(昭和 58 年 10 月 3 日)